

三井のリフォーム 住生活研究所 所長 西田 恭子

独立した子どもとの接点探し

近年、五〇、六〇代の人たちが、「年をとったら、施設に入るつもり」と話すのをよく聞く。つまり、リタイアしたばかりの、またはリタイアを目前に控えた親世代の人は「子どもの世話に

ならない」とか、「子どもに面倒をかけたくない」という意識が強く、自分の老後は自宅ではなく、積極的に施設を利用しようと考えているようだ。しかし、自分たちがイメージする暮らしが実現できる施設が、簡単に見つかるのか？ 万理想的な施設があっても、何年も待機となり、すぐに入居できるとは限らない。

日本人の平均寿命は、男性七九・四四歳、女性八五・九〇歳でリタイア後も多くの時間が残されるようになった。六〇代の人なら、ライフステージが、もうひとつかふたつ残されていると考えていいだろう。会社や子育てから解放された六〇代が、趣味を深めたり、ボランティア活動をしたり、キャリアを活かした教室を開いたり……と動き始めている。施設に入るのを待つではなく、アクティビニアが現役時代とは違

った暮らしを充実させるためにも、自宅のリフォームは大きな力になるはずだ。六〇代夫婦ふたり暮らしを中心に分析すると、「独立したシニア像」が見えてくる。まだまだこれからという意気込みと、高齢期を見据えるという両面を意識しながら人生を考えているのだが、高齢社会に向けた新たなシニア向けリフォームのポイントは何だろうか。家の基本性能を整え、あと二〇年大丈夫な家にしてください。お掃除性能のいい機器を入れ、家事の軽減を図ってほしい。車椅子や介護も念頭に設えてください。寒いのは嫌、暑いのも嫌、広すぎる家は嫌、狭いリビングはもつと嫌と、数十年の暮らしの不満が吹き出して話されるが、本当は悪いところを直したいのではなく、これからの暮らしを充実させる家づくりがしたいのではないだろうか。

夫婦ふたりでいられる時間も限られてきて、共に楽しく過ごす生活づくりと、いずれ来る伴侶との別れを意識して自立した暮らしを模索する。その両方がシニアリフォームでは求められている気がする。ただご主人様はそんなことは考えたくないのか、自分が残り、ひとりになるとは思っていない。平均寿命から思うのか、ひとりでは生活できないと思いついでいるのか、子どもたちに父の威厳で接してきた方ほど、今更子どもを頼りにするなどと考えられないようだ。

だが六〇代からの人生を豊かにするには、もう一度子どもとの係わり方を作り直すことも大事だ。夫婦ふたり暮らしだが、孫の玩具部屋を作られた方もいた。職住隣接が目的の子どもの住まいの近くに引越越し、親の家を子ども一家のつどいの場とした方もいた。

アクティブシニアと呼ばれる団塊世代が、早々と終の棲み家は夫婦で決まらずにはいないだろうか。シートと呼ばれる方が保育園のお迎えをしていることも珍しくない時代がきた。リタイア後の子世帯からの期待度は思っているより大きい。子どもに面倒をかけたないという前に、独立した子どもと再び係わる生活づくりをしてもいいのではと思う。



西田恭子氏のプロフィール
一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。(社)日本建築家協会正会員。